

本説と幽玄

——中世の文芸論における浪漫的傾向——

岡崎正

本稿は、日本の中世文芸論に見られる本説ほんせつの概念と、幽玄という美的理念との関連を探ろうとするものである。そして、この両者の関連を通じて、中世文芸の様式的特徴を捉えてみたいと思う。

以下の論における中世の範囲は、常識的にほぼ一二世紀末から一六世紀末までとする。(文芸における中世的特性は、必ずしも右の範囲内のみ現われるものではないが、この問題は別の機会に論ずることとする。)

—

本説については、例えば和歌・連歌・謡曲など個々の具体的作品を分析することによって、それらがどのような典拠により制作されたかを知ることができるであろうが、ここで

は、歌論・連歌論・能論などを手がかりとして、中世の基本的文芸論の一つである本説論を跡づけてみたい。また、古代や近世には、本説に関する論が存在したかどうかという疑問も生ずるのであるが、今はこれを問題とはしない。更に、幽玄をとり上げるのは、これが中世の文芸理念としては最も中心をなすものと考えられ、しかも、ほとんどすべての分野において必ず論及されているものであるからにほかならない。

まず、最も伝統的なジャンルであった和歌において、歌論家はどのような本説論を展開したかを見たい。以下、本説・本体という語も、本説とほぼ同義語と考えて、その内容を概観することにしよう。もちろん、本説・本歌・本体という用語を掲げていない場合でも、明らかに本説論に関するものと認められるならば、それらをも引用することがある。

中世歌論は、やはり俊成から出発すると考えるのが妥当である。続いて、長明・定家の言を引用し、中世初期の本説論と幽玄論とを並列してみよう。ただ、すべての資料を網羅することはできないから、それぞれ重要な言と思われるものを挙げることにする。

○歌の本躰には、ただ古今集を仰ぎ信ずべき事なり。(『古来風躰抄』)

○万葉集は、時世久しく隔たり移りて、歌の姿・詞、うちまかせて学び難かるべし。古今こそは、本躰と仰ぎ信ずべきものなれば、いづれもおろかならねど、その中にも殊なるどもを、所々記し侍るなり。(同右)

俊成は、『万葉集』を高く評価しながら、なお『古今集』を絶対的に尊重していたようである。しかし、『古今集』を仰ぐべき信念こそ強いけれども、その理由については必ずしも十分に述べていないように思われる。他に「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり。」(『六百番歌合』判詞)ということばも伝えられており、『源氏物語』の物語的情調と和歌的情調とに、通じるものを直観していたのであろう。

一方、中世の幽玄の歌風は、俊成によって樹立されたといわれるが、その幽玄論は、多くの歌合判詞の中に散在している。例えば『御裳濯川歌合』における西行の歌「心なき身に

もあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮」を評して、「鴨立つ沢といへる、こころ幽玄に、すがた及びがたし。」との判詞を与えたことなどにその考え方が端的にあらわれている。それは幽玄という語の有する本来的な感じ、すなわち幽寂・あわれ深さというようなものである。自身の「夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」は、自ら幽玄なものを示してみせた作といえる。俊成は「やさしく艶に、心も深くあはれなるところもありき。」(『後鳥羽院御口伝』)と評されたが、「心も深くあはれ」なものが、俊成の幽玄であろう。又、「やさしく艶」が、この後の歌人らの幽玄の世界を色どっていくようになるとも考えられる。

俊成において、本説と幽玄の情調とが、どのように関連するかは、俊成自身明確に語ってはいない。彼が『古今集』や『源氏物語』を信じて模範とすべきであると考えていたことは、明らかな事実であるが、俊成の個性とか表現意欲は、同時に新しいものを目指したことも確かである。伝統の中に普遍的なものを学びとり、それを地盤として、幽玄の世界を構築していこうとしたとも言えようか。こういう捉え方は俊成に対してだけではなく、以下の諸家の場合にも言えることである。

次に長明の『無名抄』を取りあげて、同様の問題に触れてみたい。

○中古の哥の躰も古今より出来たり。(「近代歌躰事」)

○仮名に物書く事は、哥の序は古今の仮名序を本とす。日記は大鏡のことざまを習ふ。和歌の詞は伊勢物語ならびに後撰の哥詞を学ぶ。物語は源氏に過ぎたる物なし。皆

これらを思はへて書くべき也。(「仮名序事」)

などとあつて、和歌は『古今集』『伊勢物語』『後撰集』を学ぶべきことを言っている。序・日記・物語を書くには、『古今』『大鏡』『源氏』を習うがいいと言う。なお同書には、清輔が、歌の大事として、『万葉集』を返す返す見たということとを伝えている(「清輔宏才事」)。これは長明の『万葉集』尊重を間接的に表明したものである。同時に長明は、次のように留意する。

○古哥を取る事、又やうあり。古き哥の中に、をかしき詞の哥に立ち入りて飾りと成りぬべきを取りて、わりなく続くべきなり。たとへば、夏か秋か問へど白玉岩根より離れて落つる滝川の水 此等の躰なり。しかるを、古哥を盗むは一の故実と斗知りて、よきあしき詞をも見分かず、みだりにとりて怪しげに続けたる、口惜しき事なり。いかにもあらはに取るべし。ほの隠したる、いとわ

ろし。又、古歌にとりてことなる秀句をば取るべからず。なにとなく隠ろへたる詞のをかしく取りなしつべきを見はからふなり。(「故実の躰と云事」)

○古集の中に様々の姿・詞、一偏ならず。その中に、今の世の風に適へるを見計ひて、その中の是を本として、且は其躰を習ひ、且はその詞を盗むべき也。(「とこねの事」)

古歌を盗用する場合、盲目的な追隨・模倣を戒め、時代に即応した詞の選択の必要を説くのである。

一方、長明は和歌の本質的な要件の一として、幽玄をとり上げる。

○ここに今の人、哥のさまの世々によみ古されにけることを知りて、更に古風に帰りて、幽玄の躰を学ぶ事の出来る也。是によりて、中古の流れを習ふ輩目を驚かして譏り嘲ける。(「近代歌躰事」)

これは、古風の中に幽玄体を融和させようとする俊成らの方を認めているらしいのである。「中古の流れを習ふ輩」とは、多分定家らを達磨宗と呼んだ保守主義者を指したものであろうか。尤も長明は、俊成とは異なつた幽玄を考えている。

○幽玄の躰、まづ名を聞くより惑ひぬべし。自らもいと心得ぬ事なれば、定かにいかに申すべし共覚え侍らねど、

よく境に入れる人々の申されし趣は、詮はただ詞に現れぬ余情、姿に見えぬ景気なるべし。(『近代歌躰事』)

といひ、このような幽玄を実現し得たら、「三十一字が中に天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる術にては侍れ。」と、『古今集』序に復帰する姿勢をうかがわせる。この幽玄が、余りに強調されると、「無心所着」の歌となり、「達磨宗」と呼ばれることをも意識している。以上のように、長明は古典信奉者に違ひなかつたが、時代に対して敏感に反応し、俊成ともまた陰影の異なる、言外の余情を主とする幽玄を創案した。本説を尊びながら、そこに浪漫的な幽玄のヴェールを蔽おうとしたのである。

定家の歌論には、本説・本歌について述べたものが多いが、ここに主なるものを指摘してみよう。

○詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて、寛平以前の歌にならば、自らよろしきこともなか侍らざらむ。古きをこひねがふにとりて、昔の歌の詞を改めず、よみすゑたるを、即ち本歌とすと申すなり。(『近代秀歌』)

○情以新為先求入未詠之詞以旧可用詞不可出三代集先達之所用新古今古人歌同詠歌大概可用之

○常観念古歌之景気可染心。殊可見習者、古今・伊勢物語・後撰・拾遺・三十六人集之中殊上手歌可懸心。

雖非和歌之先達時節之景気・世間之盛衰為知物由、

白氏文集第一・第二帙常可握翫深通和歌之心(同右)

○和歌無師匠。只以旧歌為師。染心於古風、習詞於先達者、誰人不詠之哉。(同右)

○そもそも、歌はただ日ごろ記し申し候ひし如く、万葉よりこのかたの勅撰をしづかに御覧ぜられて、変り行き候ひけるすがたどもを御心得候へ。(『毎月抄』)

要するに、『万葉集』以降三代集、『伊勢物語』を習ひ、それらの詞を十分に利用して、新鮮な心情を表現せよというのである。この考え方は、定家の中心をなすものであり、各書にことばを変えて繰り返し主張される。なお、白詩を学ぶことを強調したのは、当代歌人の視野を広げさせようとする意向が感じられて興味深い。概して定家もまた、古典重視の線からはずれていない。

本歌を範として、これを利用する実際的な心構えについては、到る所に言及されていて煩雑なほどであるから、『毎月抄』から一節を抄出する。

○本歌取り侍るやうは、さきにも記し申し候ひし花の歌をやがて花によみ、月の歌をやがて月にてよむ事は、達者

のわざなるべし。春の歌をば、秋・冬などによみかへ、恋の歌をば、雑や季の歌などにて、しかもその歌を取れるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候。本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじきにて候。

この文に続いて具体的な例を挙げて説明を加えている。「情以新為先、詞以旧可用。」は、歌論の基本とも見られる言説であるが、実際の本歌取りになると、かなり技術を前面にもち出した知的遊戯の感が強い。実はこの遊びの精神が徹底されるところに、連歌の世界が拓かれていくことになると思われる。本格的な連歌では、規則・形式が整備され、幽玄から、ひえ・さびなどという晦渋な心を要求されるようになるのである。

定家は本説・本歌を重視し、本歌取りの技巧を通して新しい心を追求したが、彼の歌論の中心は「有心」に傾き、幽玄はこれに吸収されてしまった。十体の中に幽玄体を設定してはいるが、「この十体の中に、いづれも有心躰に過ぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。」(『毎月抄』)という。我々にとっては、幽玄・有心・秀逸の差違は甚だ分明でない。この不分明なところが、実は極めて浪漫的である。ともかく定家の幽玄についてのわずかな言を聞こうと思う。偽書といわれる『愚秘抄』に、「やさしく類なき女の姿を見る様ならむ歌は

幽玄なるべし。」とあり、幽玄な歌とは『三五記』に「心詞の外にかげりのうかびそへたらむ歌」を指すとしていて、余情妖艶に近い立場をとっていたようである。

定家以後の本説論のうち、ごく主なものを指摘してみる。

○詞につきて不審をもひらく方には、源氏物語にすぎたるはなし。(『八雲御抄』)

○まだしき程は、万葉集見たる折は百首の哥なかばは万葉集の歌詠まれ、源氏等物語見たる比は、又そのやうなるを心得て詠むべき也。(『後鳥羽院御口伝』)

○源氏等の物語の歌の心をば取らず、詞を取るは苦しからずと申しき。(同右)

○古今を以て本とし、貫之を以て祖宗とす。しかれば、此の道を好まむ輩は、いかにも此集を能く稽古し、序の起りをも沙汰し明らめば、おのづから道に深き人たるべし。(『古今集序註』)

○また人のいたくしらぬ歌本歌に取べからず。作者よく取たると思へども、人しらぬは無念也。またあながち本歌とすることは宜しからぬ事也。近代の人の歌取べからず、冥加なき事なり。(『和歌秘抄』)

この段階においても、基準とした本歌の範囲は、依然として

変化がない。後二者は親房と為世の論書であつて、定家死後、約八〇年のものである(定家は一二四一年に歿した)。この後、和歌には『風雅集』以後頼阿など二条歌学を集大成した人物もあらわれたが、概して沈滞の一途を辿つたかと思われ、むしろ連歌の旺盛な時代になつていくのである。中世後期の代表歌人である正徹の言う所を若干抜き出してみると、次のようなものがある。

○本哥に取る事、草紙には源氏の事は申すに不及、古物語も取る也。住吉・正三位・竹取・伊勢物語をば、皆哥をも詞をも取る也。堀河院百首の作者の外も、其時の人の哥をば皆本歌に取るべき也。西行は鳥羽院の北面にて有りしかば、堀河院の御時代はたくさむに有るべき也。仍

西行が哥をば本哥に取るべき也。(『正徹物語』)

正徹は定家の死後、約二〇〇余年後に歿した(一四五九年)。時代は流れて、正徹の範とする本歌も、堀河院百首の時代(一一〇四年)、西行(一一九〇年歿)の時代まで引き下ろされるのである。定家は本歌として「三代集」までを考え、正徹は西行までを考えたとすると、本歌の時代的下限は、定家・正徹ともそれぞれ約二五〇年前までの歌を考え、不思議な一致を見せている。ともかく正徹は、「此道にて定家をなみせん輩は、冥加も有るべからず。」(同右)とまで定家を中心

酔していたから、実際には、彼の考えた本歌の下限は、西行の時代よりもっと降るわけであろう。

正徹の幽玄には、これまでの幽玄論の内容とは、かなり変化の跡が見られる。『正徹物語』の所々に語られている幽玄については、例えば、

○咲けば散る夜のまの花の夢のうちにやがてまぎれぬ峯の白雲／幽玄躰の哥也。幽玄と云ふ物は、心に有りて詞にいはれぬもの也。月に薄雲のおほひたるや、山の紅葉に秋の霧のかかれる風情を幽玄の姿とする也。是はいづくか幽玄ぞと問ふにも、いづくといひがたき也。

○俊成女の／哀れなる心長さのゆくゑともみしよの夢をたれかさだめん／極まる幽玄の哥也。

などに見られるように、月に薄雲のかかっている比喻の通り、心で理解されても言葉では表わし得ないもの、夢のような縹渺としたものを意味するらしい。定家の「春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるる横雲の空」を思わせる気分であろうか。

○いかなる事を幽玄躰と申すべきやらん。これぞ幽玄躰とてさだかに詞にも心にも思ふ斗りいふべきにはあらぬ也。行雲廻雪を幽玄躰と申し侍れば、空に雲のたなびき雪の風に飄ふ風情を幽玄躰と云ふべきにや。定家の書き

たる愚秘とやらんに「幽玄躰を物にたとへていはゞ、もろこしに襄王と云ふ御門おはしましき（下略）」

ここでは和歌の一体としての幽玄体を行雲廻雪の語で説明する。「行雲廻雪」は正徹自らがいうように、定家仮託の書『愚秘抄』から援用したもので、『抄』には次のようにある。

○やさしく気高くして、薄雲の月を帯びたらむ心ちせむ歌を行雲と申すべし。又やさしく気色ばみてたゞならぬが、しかもこまやかに飛ぶ雪の、いたく強からぬ風に迷ひちる心ちせむ歌を、廻雪とは申し侍るべきにや。

『愚秘抄』が偽書であると、正徹は知っていたかどうかはわからないが、ここにも定家私淑の態度はあらわである。『抄』によれば「やさしく」「こまやか」な情調が幽玄である。中国の伝説の引用は省いたが、「巫山に朝にたなびく雲、夕に降らん雨」を神女の形見とながめてほしいという筋である。正徹は続けていう。

○是もいづくか幽玄なるぞといふ事、面々の心の内にあるべき也。更に詞にいひ出し、心に明らかに思ひ分くべき事にあらぬにや。ただ飄白としたる躰を幽玄躰と申すべきか。南殿の花の盛りに咲き乱れたるを、絹袴きたる女房四、五人詠めたらん風情を幽玄躰といふべきか。

優美・艶麗に、言語を絶した幾分神秘性を加えた情調が幽玄

であるということになる。ここまでくると、世阿弥の世界を思わせるものがあり、更に禅竹の宗教的な幽玄論の近いことを感じさせる。（因みに、正徹は世阿弥とほぼ同時代に生きた人である。）

右に見たように、中世歌人達は、ほとんど例外なく本説論を掲げ、そしてまた、ほとんどすべての歌人が幽玄論を提出している。本説論と幽玄論とは、本来異なる次元の問題であるが、彼等は、伝統尊重という古典主義的な立脚地を固め、その本説論という歴史的に揺がないものに拠って安定した境地を得た上で、詞は古きに拠る一方、同時に、心は新しいものでなければならぬと考えて、彼等は、幽玄の洗練に没頭したのである。幽玄とは一面において伝統的な情調であるから、古典的でもあるが、彼等の追求した幽玄は、また極めて美的・情調的・感性的・神秘的なものであり、遂には象徴的なものに昇華されたといってもよい。これはどう考えても、浪漫的な情調といわざるを得ない。してみると、中世歌論は古典的と浪漫的の総合の上であり、「詞」を媒介とした「心」の優位を考えれば、中世歌論はむしろ浪漫的なものの上に成り立ったとも言えないことはない。

二

中世の中期から後期にかけての連歌の流行は、能・狂言の盛行と共に、特徴的な様相を呈したと思われる。連歌論においても、多数の伝書に、多くの本説論・幽玄論の展開が見られる。二条良基はその出発点に立つ人と考えられるので、まず良基の本説論を考えてみたい。

○只堪能に練習して座功をつむより外の稽古あるべからず、その上に三代集・源氏の物語・伊勢物語・名所の歌枕、かやうの類を披見して有興さまにとりなすべし。
(『連理秘抄』)

○凡新古今以来の作者不可用之、本歌は堀河院百首の作者までをとるべし。又雖為近代勅撰、古人の歌をとるべし。証歌は近代も可引之。(同右)

○古語ヲ用ル事、歌ニハ俊成・定家ノ説ヨリ外ハ今ハ用事ナシ。連歌ニハ俊頼朝臣・顕昭ナドガ説モ用候ベキヤラシ。答云、歌ハ皆定家ノ流タル間、他流ヲ用事ナシ。連歌ハ俊頼・顕昭等ガ説モ親行・仙覚ガ源氏・万葉ノ説ヲモ可用也。(『九州問答』)

本説の下限は正徹と同じく『新古今』までとする。むしろ正

徹が良基に倣ったのかもしれない。同様の見解は、「連歌には近代の歌よみの歌をも用なり。」(『近來風体抄』)にも見られ、近代というのは、「歌ハ定家ノ流タル間」(『九州問答』)とあるから、多分、定家の流を汲むものであれば、かなり新しいものを本歌としてもよいであろう。なお良基は、「本説」は「本歌」と同義だといっている(『連理秘抄』)。本歌を利用するにあたっての心構えについては、極めて綿密に注意している。

○詞ヲ広く使ヒ寄合ヲ知事、万葉ニハシカズ、但シ常ニ好ミ用レバ、連歌ノ姿モ荒クナル也。殊ニ用捨シテ簡要ノ時出サルベシ。古今以後三代集ナドハ、詞ハナヘタル様ニ覚ユル也。源氏寄合ハ第一事也。伊勢物語・大和物語様ノ物、何ニテモアレ、和漢ノ事ヲ見残事アルベカラズ。名所ハ名寄第一也。(『九州問答』)

○本歌・本説を取事、其事と聞ゆるやうにてしかも詞すくなく取るべし。(中略)本歌・本説取様をば、世の人みな知れりといへども其言をあらはさずして、面影ばかりをとる一体也。宇治の中の君、兵部卿宮に渡りて、物うらめしき夕暮に日晩くしの声を聞て、山里の松のかけにもかく計ばかりなど詠め侍し、その折の事、なにとなく思出られ侍り。(『擊蒙抄』)

できるだけ多くの定評ある作品に触れて、それとなく我がものとせよという意見らしい。

○言葉の幽玄は生得のことなり。それを初より強き連歌に練習しぬれば、やがて詞荒くなる、幽玄なるに習へば生得に不堪なる人も風体を得る也。(『連理秘抄』)

これは連歌の修練には、幽玄な本説を身につければ、生まれつきの上手にも匹敵する境地を得ることができらるうといふのである。

そこで、次に良基の幽玄論について考えることにする。良基の場合、幽玄の本質に触れたことばは意外に少なく、幽玄を或る程度理解した上で、それを表現の上に示すのがよいといっているようである。

○幽玄の景物を荒蕪の詞にてそゝかす事、尤いたましき事なり。(『連理秘抄』)

この幽玄は、対象の属性として用いた、数少ない例の一つだと思ふが、美しい景はそれにふさわしい幽玄な詞で詠めたいことであらうか。

○上古・中古・当世、鎌倉・京、本式・新式、色々様々に仕替へたり。所詮当時新式上手の風体といふは、先詞幽玄にして、心深く物あさきやうにするを詮とすべし。

(同右)

時代・場所・方法の如何を問わず、幽玄な表現によって深い心を詠むという、基本的理念を説いたものである。

○上手の常に用ゐて幽玄ならん言葉を、耳底にとどめて能々思索すべし。(同右)

○只当座の会などに興を催さんためには、少々いはれぬ様な事をも面白く、幽玄に聞所あるやうにすべし。(同右)

○寄合もなく、付にくからん句には、一句を飾りたて、幽玄に付けぬれば、細やかなるあひしらひは無けれども、余情のそひて面白く聞ゆる也。(同右)

○大方余りに幽玄ばかりにて珍しく目のさむる方の人からん人は時々めづらしき様にもしならふべし。又ことば生得にこわき人は、幾度もやさしき事を好むべし。幽玄にてわるき事はあるまじけれども連歌のちひさくつまりたる様になる事のあるにや、能々用心すべし。(同右)

幽玄の内容については、これらの文からは十分わからないが、上手の用いることば、聞き所あることば、余情のある面白いことば、などによって醸される気分が幽玄だと言つていふようである。そして、幽玄過剰は連歌の格を矮小ならしめる危険性を誘うことを指摘しているのは、卓見であると思ふ。

○連歌ハ、カヽリ、姿ヲ第一トスベシ。イカニ珍敷事モ、姿カヽリ悪クナリヌレバ更ニ面白モ不覚、譬ヘバ微女ノ麻衣キタルガゴトシ。ヤサシク幽玄ナルヲ先トス。雪月花ノ景物ナリトモ、コハヽシキハ徒事ナリ。是ヲ心得分ベキ物ナリ。(『連歌十様』)

○先づ幽玄の姿にて、細くすべくとある詞をばよしと心得べし。ふしくれだち、こはヽ敷詞を悪しと心得べし。(『十問最秘抄』)

○俗なる詞と云は、先けずしく荒くふとくと聞え、むざくと聞ゆる也。幽玄なる詞は、さはくすべくと聞ゆる也。近比救済・周阿などが詞ざしをまなぶべし。

(同右)

○詩も歌も花実揃ひたるを良しと申也。花あれども実なきはわろし。実ある共花なきはわろし。されば鳥の翅のごとし。風情ありて而もかヽり幽玄なるべし。心につられて詞が損じ、詞につられて心が損ずる也。能々料簡あるべし。(同右)

「やさしく」「すべく」「して」「さはく」と聞え、花実(詞と心)の兼備した歌こそ、幽玄に近いと解される。何れにしても俗でない、美しい、潇洒な感じを伴ったものと考えられる。なお、「詩ノ詞ヲ取バ殊更幽玄ニヤサシキ事ヲ取

ベシ、コハヽシキ事ヲバ不可取。」(『九州問答』)の言もあり、漢詩を本説とする場合も、全く同様にすべきだと言っている。

○まつみゆる梢ばかりに風吹て／こゝろあるべきやまざとの秋／此句、又幽趣を得たり。(『擊蒙抄』)

○まつかぜさむしをばな吹をと／ひとりある野中の里の秋くれて／時景ありて、幽情をえたり。(同右)

实例をあげて、幽玄な歌を説明したものである。これは句の付け方が問題となるのであるから、一概に和歌と同じように論じられないが、割にさびくとした気分を強調しているように思われる。

右に見た通り、良基の本説観は、格別新たなものを狙っているように思われるが、幽玄論にはやや変化が見られ、姿・かかり・やさしさ・美しさ・高貴さを挙げるなど、世阿弥との共通点があらわれて来た感がなくはない。要するに良基は、本説については、従来の考え方を踏襲し、連歌という新しいジャンルの確立のために幽玄の付け味を右のように考えたのではあるまいか。古典をふまえつつ、浪漫的な情調を徐々に進めたと見られるのである。

連歌論の代表者の一人として、心敬の立場はどうであろう

か。心敬は禅竹と全く同時代の人であり、歌人としては正徹の系統に属するが、彼の本説観はどうであろうか。

○自在無窮、不可説の風雅を尽くし、この道の悟りを得べきは、新古今集あたりの歌仙の作なるべし。(『ささめごと』)

○八雲の御抄などにも、稽古といへばとて、あながち天竺唐の文を尽くせにもあらず。ただ万葉集、三代集、伊勢物語などのうちなるべし。ふるまひの艶に、言葉の気高きは、源氏・狭衣なり。これらを少しもうかがはざらむ歌人は無下の事と古人も申侍り。(同右)

右のことばから判断すると、『万葉集』から『新古今集』までの作品を本説と考えているらしい。『狭衣』などが登場しているのは、どのような理由からであろうか。ともかく「言葉の気高さ」を学べということが中心のようである。従って心敬の本説の範囲は、大体、正徹の設定したものと大差がないと言える。

心敬が幽玄に言及した文はかなり多いが、これらが、やがて「ひえ」「やせ」「さむし」というような気分に近いといふことは否定できないことである。まず幽玄について述べられた主なことばを拾ってみよう。

○この道は、ひとへに余情・幽玄の心姿を旨として、いひ残し理なき所に幽玄感情は待るべしと也。(『ささめごと』)

○昔の人の幽玄と、大やうの輩の句と、はるかに変り侍るとなむ。古人の幽玄体と取り置けるは、心を最要にせしに哉。世の常の好士の心得たるは、姿・言葉の優ばみたる也。(同右)

などとあつて、伝統的な立場を守っており、特に当代の人士が、「姿・言葉の優ばみたる」をのみ幽玄と心得て、「心」の幽玄を忘れていたのを嘆いているのである。

このように、芸術的美の発現が内面化される傾向は、他の場合にも見られ、心敬の連歌論は精神化・宗教化への道を選んでいたと思われるのである。従って心敬の場合、幽玄はもちろんであるが、「艶」の捉え方などにもそれが感じられる。

○この道に入らむ輩は、まず艶を宗と修行すべき事と也。艶といふも、あながち句の姿、言葉の優ばみ、花めきたるにはあるべからず。胸の内清く、人間の色欲うすく、万に哀れ深く、物ごとに跡なき事を思ひしめ、人の情けを忘れず、その人の恩には一つの命をも軽く思ひ侍らむ人の胸より出でたる句なるべし。心の飾りたる輩の句は、姿、言葉優ばみたりともまことの人の耳よりは偽のみなるべし。(同右)

ということばに、その傾向がよくあらわれていると思う。

○氷ばかり艶なるはなし。苜田の原などの朝薄氷、ふりた

るひはだの軒などのつらら、枯野の草木など、露霜のとぢたる風情、面白くも艶にも侍らずや。『ひとりごと』この主張を前者と関連させて考えれば、氷によって象徴される艶は、やはり清らかなすき通るような美しさということか。中世初期の用法とは非常に異った意味になっていて、次の用例に近いであろう。

○水精の物に瑠璃を盛りたるやうにといへり。清く寒かれと也。『ささめ』と

○思ひかねの歌は、観算供奉が日も詠吟すれば寒しとこそ申せ。詩にも賈島はやせ、孟浩はさむしといへり。(同右)

○昔歌仙に、ある人の、この道をばいかやうに修行し侍るべきぞと尋ね侍れば、枯野の薄あり明の月と答へ侍りしとなり。これはいはぬ所に心をかけ、ひえ、さびたる方を悟り知れとなり。(同右)

○もとより哥道は毛詩より出たる道なれば詩の方、心工夫よろしかるべくや、歌道よりは寒くひえやせ、位たかく侍る歟、連歌の拙くふとみ、聊爾の道になり行侍る、斯様の心ざし廢る故なるやらん。『所々返答』

「清く寒かれ」「寒し」「やせ」「ひえ」「さび」が多用されるようになる。公平にみて、これらは幽玄の質的变化を遂げた

ものと考えてよいであろう。心敬はこうした宗教的観照によるらしい立言を文芸の世界に導入する。和歌から連歌への伝統を守りながら、幽玄をも、深化した清浄な美に高めようとしたと思われる。このことが同時に、芸術論としては難解なものへと向かわせた要因となったと言えよう。なお、宗祇以後の連歌論については割愛する。

三

ここで世阿弥の能論における本説と幽玄について粗描を試みることにする。世阿弥の能論は『風姿花伝』から『却来華』に至るまで、三〇年余りにわたって著述された伝書によって知ることができる。それは著者の年齢にして三〇歳代の後半から七〇歳ごろまでの作であり、内容的には、父観阿弥の庭訓に基く論から、晩年の極めて宗教的な言説に及ぶものである。そこで、世阿弥の本説論・幽玄論を見るには、次の文によるのが、最も便利であろう。

○よき能と申は、本説正しく、めづらしき風体にて、詰め所ありて、かゝり幽玄ならんを、第一とすべし。『風姿花伝』「花修」

理想的な能の条件として、第一に「本説正しく」を挙げる。

しかも新鮮で、山があり、全体として幽玄な風情を感じさせなければならぬという。常識的には、この四条件が同時に満足されるのは困難だと考えるが、世阿弥は習練と覚悟によって実現は可能だとするのである。

世阿弥は具体的に、どんなものを本説と考えていたか。

○種とは、芸能の本説に、其態をなす人体にして、舞歌のため大用なる事を知るべし。抑、遊楽体と者、舞歌なり。舞歌二曲の態をなさざらん人体の種ならば、いかなる古人・名匠なりとも、遊楽の見風あるべからず。此理を能々安得すべし。たとへば、物まねの人体の品々、天女・神女・乙女、是、神楽の舞歌也。男体には業平・黒主・源氏、如此遊士、女体には、伊勢・小町・祇王・祇女・静・百万、如此遊女、是はみな、其人体いづれも舞歌遊風の名望の人なれば、これらを能の根本体になしたるは、をのづから遊楽の見風の大切あるべし。又、放下には、自然居士・花月・東岸居士・西岸居士などの遊狂、其外、無名の男女・老若の人体、ことごとく舞歌によるしき風体に入て、是を作書すべし。〔三道〕

ここでは、本説となる作品というより、登場人物の典型を求めたもので、また舞歌を伴う能としてふさわしい、神・男・女・放下の例をあげている。特に本説としての作品を挙げた

ものに「軍体の能姿、仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことにことに平家物語のまゝに書べし。」〔三道〕がある。しかし、『平家物語』をそのままに書けとはいっても、実際には原典そのものを舞台化したとは言いきれない。「開口より、その謂れと、やがて人の知ることくならんずる来歴を書くべし。」〔風姿花伝〕「花修」の程度にとどまっている場合が多い。それならば本説に依らない、完全な創作能を認めないかという、「極めたる達人の才学の能なり。」〔三道〕と述べて、全く否定してはいないが、困難なわざであることをほのめかしている。このあたりに世阿弥の本説重視の態度が明らかである。

右に述べたように、世阿弥は、正しい本説を基盤に据え、幽玄の風趣により、よき能に仕上げよというのである。ここで世阿弥の幽玄の認識のしかたが問題になる。『花鏡』の「幽玄之入堺事」に説いてある文が焦点になるであろう。

○たゞ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。

文そのものの解釈には、全く難解なところは無い。極めて端的な表現である。この文に続いて、「人ないの幽玄」「詞の幽玄」「音曲の幽玄」「舞の幽玄」「鬼の幽玄」に分けて説明を加える。特に「言葉の幽玄ならんためには歌道を習ひ」と言っている点にも彼の古典尊重の態度があらわれている。彼の

立論には、多分に貴族趣味が作用していたことも否定できず、当時としてかなり洗練されたものであった。

世阿弥は晩年になるに従って、宗教的境地に深まって行き、その能論にも煩瑣な程の宗教色が施され、もはや芸術論とは言い難いような趣を呈する。ここに、後期の伝書の中から、本説と幽玄とについての立言をひき出すことは余り意味はないように思う。そこには行き着いた境地が満足げに語られているだけで、『花鏡』ころまでの、自信に満ちた指導者の言は感じられない。なお、世阿弥の能論については、別に詳論したい。

以上、歌論・連歌論・能論を通して、その共通点を探った結果、古典尊重の精神(一応古典的と呼ぶ)と、幽玄という美的理念(一応浪漫的と呼ぶ)との融合体として中世の文芸を捉えることができたと思う。この捉え方は、やや大胆であると思われるかもしれない。特に幽玄というものを浪漫的なものとして規定することに疑問を感じる面があるかと思うので、少しくこの点にふれる。

四

本来、古典的と浪漫的とは対立する概念であって、西欧一七世紀から一九世紀にかけて両者は華々しく拮抗した。古典的が、近世を開く契機となったギリシアの古代を尊重する態度から察せられるように、規範・整齊・秩序・普遍を目指すのに対して、浪漫的は、古典的に反撥して起ったもので、自由・混沌・無限・個性を主張する立場であった。

ところが、浪漫的には、もう一つの用法がある。それは、ギリシア風の厳格な形式と均衡を無視し、空想的・伝奇的・神秘的・感性的・虚構的・宗教的・抒情的等々の形容を冠することのできるものであって、西欧四世紀ごろから約千年間に及ぶ中世の思潮を表わすものである。文芸に即して言えば、冒険と恋愛とキリスト教と騎士道によって具象化されるものである。

この二様の浪漫的は、古典的に対立する点は共通であるが、前者は、近代浪漫主義というべく、後者は、中世風浪漫的というべきである。

巨視的に見て、日本の中世には、前者の浪漫主義は適用できない。後者の意味での浪漫的について考えると、空想的・伝奇的・神秘的な浪漫性は、既に前代の『竹取物語』等にあらわれ、冒険・恋愛・騎士道的な浪漫性は『源氏物語』に、極めて典型的に瀾漫している。(キリスト教的は仏教的におき

かえられよう。『万葉』『古今』を首とする和歌が、抒情的であることは言うまでもない。つまり、中世的浪漫性は、夙く古代において広く醗酵されていたといわなければならぬ。わが中世人は、このような浪漫的古典を継承しつつ、更に抒情的・感性的に、そして宗教的・神秘的に浪漫化をなし遂げたのである。このことは軍記物語においても言える。

(日本の文芸には古典的古代は存せず、初めから浪漫的中世であったと言うこともできる。この点は別に論ずる。)

私は、中世のいわゆる芸術論における本説と幽玄とに注目して、様式的に、本説とは古典的(正確には擬古典的)というのがよいかもしれない)、幽玄とは、感性的・抒情的・宗教的、更に象徴的である意味で、浪漫的としなければならぬと考える。そして、中世の人は、前代の浪漫的古典を受容し、それらを幽玄という浪漫的な情調で更に包みこんだという意味で、中世の文芸は二重に浪漫的である。幽玄という美的理念(美的情調)は、時代と人によって、意味が変容したことは前に見た通りであるが、いずれの断面においても、浪漫的なものに属するものであることは疑いない所である。

中世の文芸そのものが浪漫的であるということは、文芸を創り出した人が浪漫的人間であったことを意味し、古典を取り込みながら中世文芸の理想を説いた人々もまた浪漫的な人

間であった。その下敷きとなった古典がまた、浪漫的情調の極めて濃厚なものであった。このようにして生み出された日本の中世文芸は、普遍的な浪漫的文芸の有力な担い手となるのである。

なお、中世の文芸論に、本説として取り上げられている、『万葉集』『古今集』『源氏物語』等が、どのような意味で中世風な浪漫的様式を有するのか、また「幽玄」というものが中世の美的理念の典型として認め得るものかどうか、これらの諸問題は、更に今後の精細な考究に俟たなければならぬ。

(昭五〇・一一・三〇)